鎌倉殿・人物ガイドブック

フェリス女学院大学 文学部 日本語日本文学科 中世文学（谷 知子）ゼミナール制作

目次

北条義時 1
北条時政 4
安達盛長 7
梶原景時 9
比企能員 11
三浦義澄 14
和田義盛 17
足立遠元 20
八田知家 22
中原親能 24
大江広元 26
三善康信 29
二階堂行政 31
源頼朝 33
北条政子 36
源頼家 39
源実朝 41
源義経 43
静御前 46
畠山重忠 49
木曾義高 51
大姫 53

北条義時

生涯

長寛元年（1163）～元仁元年（1224）。伊豆の豪族北条時政の次男。生まれたのは源頼朝が伊豆に配流されてから 3 年後である。父時政は、頼朝の監視役であった。頼朝の妻となる北条政子は姉。

養和元年（1181）4 月、頼朝は寝所近辺の警備のため、弓矢に優れ、頼朝に忠実な者を 11 人選ぶ。義時もその中の一人で、この頃すでに、彼は頼朝の最も信頼する御家人の一人であった。頼朝とは家族ぐるみの付き合いで、建久 5 年（1194）に義時の息子北条泰時が元服した際には、烏帽子親を頼朝が勤め、逆に建久 4 年（1192）に源実朝が誕生した際には、義時が護刀を献上する役目に加わった。

建久 10 年（1199）正月、頼朝の死後、その子頼家が将軍職を継ぐが、同年４月に鎌倉殿を支える１３人の重臣に 37 歳の若さで加わった。元久 2 年（1205）妻牧の方とともに実朝排斥を企てた罪で父時政が伊豆に隠棲、義時は執権として、独裁的権力を握っていく。

承久 3 年（1221）後鳥羽院によって、全国に義時追討の宣旨が発される。承久の乱である。義時はこの戦いに勝利し、後鳥羽上皇を隠岐に配流、朝廷側についた公家や武家の土地を没収し、勲功のあった武士に与えた。鎌倉幕府は京都に六波羅探題を設置するなど、監視と支配を強めていった。

承久の乱の 3 年後、元仁元年（1224）に没し、泰時がその跡を継いだ。

文化事績

建永元年（1206）2 月 4 日、執権北条義時の山荘で和歌会が開かれ、源実朝、東重胤、内藤知親らが参加している（『吾妻鏡』）。この和歌会に参加していた東重胤が、しばらく鎌倉を不在にしたことがあり、実朝が和歌を送って鎌倉に戻るように催促するも、なかなか帰らなかった。実朝が機嫌をそこねてしまい、東重胤が困って、義時に相談したところ、義時は、和歌を詠んで献上しなさい、そうすればすぐにご機嫌がよくなるでしょうと助言したという。

承元 4 年（1210）5 月 6 日大江広元邸で源実朝を招いての和歌会や建保元年（1213）7 月 7 日将軍実朝御所の和歌会にも、北条義時は参加している。

北条義時が亡くなった後、子の泰時が哀傷の和歌を詠んで、蓮生法師に送っている。

父（義時）身まかりて（亡くなって）後、月あかく侍りける夜、蓮生法師がもとにつかはしける

山の端に隠れし人は見えもせで入りにし月はめぐり来にけり　　北条泰時

返し

隠れにし人の形見は月を見よ心のほかにすめる影かは　　蓮生法師

（『新勅撰和歌集』雑三）

（山の端に隠れるように亡くなってしまった父はもはやその姿は見えないのに、沈

んでいた月はまためぐってきたなあ）

（隠れるように見えなくなってしまったお父様の形見としては、月をご覧なさい。心の内以外に澄みきって住むことのない月の光なのだから）

父義時を月になぞらえて、その死を悲しみ、形見として偲んだ歌である。泰時は勅撰和歌集に 22 首も入集を果たし、北条氏初の勅撰和歌集入集歌人となった。

史跡

『吾妻鏡』健保 6 年（1218）7 月 9 日条には、北条義時が前日８日の戌の刻に、薬師十二神将の「戌神」から夢のお告げを受け、私財を投じて鎌倉・大倉の地に薬師堂の建設を命じたという話が記されている。「戌神」とは十二神将のうちの一つである。

建保 7 年（1219）1 月 27 日、右大臣拝賀のため鶴岡八幡宮に実朝と共に参詣する予定だった義時は突然体調を崩し、その役目を源仲章に譲り帰宅。その日の夜、参詣を終えた実朝と仲章が八幡宮の大銀杏の傍らで殺害される事件が起こる。同年 2 月 8 日の記事によると、拝賀の日の戌の刻、義時は「白い犬」が側に居るのを見たことで体調を崩してしまったのだという。そして、義時の代わりに実朝の従者を務めた仲章が首を切られた時、大倉薬師堂の戌神は堂の中から姿を消していたとされる。「戌神」の助けによって、義時は偶然にも死を免れたのだ。

鎌倉の覚園寺は、北条義時が建てた大倉の薬師如来堂を前身とし、永仁 4 年（1296）に北条貞時が元冠の再来が無いことを願い、それまでの薬師堂を真言宗だけではなく、天台・禅・浄土を学べる道場とした。本尊である薬師三尊坐像とともに、十二神将像が安置されている。敷地内では薬師堂の他にも、愛染明王を祀る愛染堂や地蔵菩薩を祀る地蔵堂があり、また「やぐら」と呼ばれる、山の斜面に穴を掘る形で作られた墓も見ることも可能だ。

北条時政

生涯

保延 4 年（1138）～建保 3 年（1215）。父は四郎大夫時方、母は伊豆掾伴為房の娘。北条政子、義時の父。伊豆に流された源頼朝の監視役をつとめ、挙兵した際には助力した。平氏を滅亡に追い込んだ後、頼朝の代官として京都と鎌倉との間の交渉にあたるなどして、鎌倉幕府草創に尽力した。

頼朝が亡くなった後、鎌倉殿を支える重臣１３人が組織され、その内の１人となる。幕府内で御家人同士の権力闘争が激化する中、比企氏をはじめ、有力御家人を次々に滅ぼし、頼家も廃して、実朝を新将軍として擁立した。

しかし、元久 2 年（1205）、妻である牧の方と共謀し、実朝を斥け、娘婿の平賀朝雅を将軍にする計画をたてるが、失敗。同年閏 7 月出家して伊豆国北条に退隠した。法名は明盛。建保 3 年（1215）正月 6 日腫れ物のため北条で没した。享年 78 歳。

文化事績

鎌倉時代の説話『古今著聞集』（橘成季）に時政と頼朝の連歌が記されている。頼朝が守山（近江国か）で時政を連れて狩をしたときに、苺がたくさん熟れているのを見て詠み合ったものである。

同じ大将（頼朝）、守山にて狩せられけるに、いちごのさかりになりたるを見て、供に北条四郎時政が候ひけるが、連歌をなんしける。

もる山のいちごさかしくなりにけり

大将、とりもあへず、

むばらがいかにうれしかるらん

（頼朝が守山で狩りをなさった時に、苺が盛んになっているのを見て、お仕えしていた北条時政が連歌を詠んだ。

守山の苺が盛んになっていますね！

頼朝は、即座に、

茨はどんなにか嬉しいことだろう）

「守山」に「守る」を「苺」に「一期」を掛けて、時政は頼家の成長を祝った。頼朝は、「茨（むばら）」に「乳母」を掛け、周囲の喜びはいかばかりかと返した。

史跡

北条氏が 9 代も権力を持ち続けたのは、時政が江の島で子孫繁栄の祈りを捧げたことが要因であると『太平記』は語る。

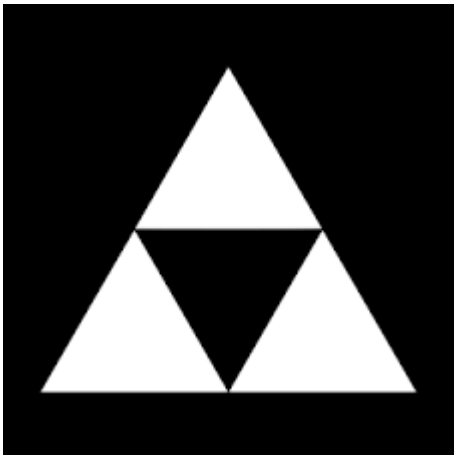
榎嶋弁才天の事

そもそも世澆季に及んで、武臣天下の権を執る事、源平両家の間に落ちて度々に及べり。しかれども、天道満てるを欠く故に、あるいは一代にして亡び、あるいは二世を待たずしてぞ失へり。しかるを、今高時天下を掌に握って、すでに九代に及べ

り。その故を委しく尋ぬれば、曩祖北条四郎時政、江嶋に参籠して、子孫の繁昌を祈る事切なり。（『太平記』）

（さて世は末世になり、武臣天下の権威を持つことは、源平両家の間になった。しかしながら、天道満ちれば欠けるものなので、一方では一代にして滅び、一方では二代を待たないで滅びた。ところが、現在高時は天下を掌に握って、もう九代になった。その理由を詳しく尋ねれば、先祖北条四郎時政、江の島に参籠して、子孫の繁盛をひたむきに祈ったからだという。）

祈願の場に登場したのが水神の龍で、鱗を落として去って行ったという。北条氏の家紋とされる「三つ鱗」は、この伝説と深い関係がある。



安達盛長

生涯

保延元年（1135）～正治２年（1200）。父は三河国（愛知県）を本拠とする藤原北家魚流小野田兼盛（広）とも（『尊卑分脈』）。足立遠元は年上の甥にあたるという説もある。名前の「安達」は、当初兄の所領である武蔵国足立郡にちなんで足立氏としていたが、晩年になり、奥州合戦に従軍した功で、本貫とされた陸奥国安達郡にちなみ「安達」の名を称したらしい。

盛長は、妻の丹後内侍の母比企尼が源頼朝の乳母であったことから、最も古くから頼朝に仕えた。また、頼朝と北条政子の間を取り持った武将でもある。本当は政子の妹宛てだった頼朝からの恋文を盛長が政子に渡し、これがきっかけで２人は付き合うことになる。つまり、安達盛長は「源頼朝の世話係兼恋のキューピット」であった。また、源氏の旗揚げに際しても味方を募って坂東中を奔走した。

頼朝没後は、出家して「蓮西」と号した。頼家の下で、鎌倉殿を支える１３人の重臣に加わった。息子景盛の妾が源頼家に略奪された事件のいざこざから幕府に討伐されそうになったが、政子の弁護で切り抜けた。

文化事績

安達盛長が源頼朝と北条政子の間を取り持ったという逸話が、『曽我物語』に記されている。『曽我物語』とは、鎌倉時代初期に起きた曽我兄弟の仇討ちを題材にした作品である。

父義朝が平治の乱に敗死した後、頼朝は伊豆に流される。豪族北条時政に３人の娘（長女は先妻の娘、二女・三女は現在の妻の娘）がいると知った頼朝は、二女に手紙を書いた。二女を選んだのは、時政の現在の妻の娘であるからという理由からだった。しかし、当時二女と三女は悪女の噂が流れていた。そこで、頼朝から手紙を預かった盛長は、宛名を長女である政子に書き換えて届けさせた。こうして知り合った頼朝と政子は文を交わすこととなり、密会を経て、夫婦となったのである。この話が真実ならば、ほんのちょっとした盛長の機転で、日本の歴史が大きく変わったわけだ。

史跡

甘縄神明神社は、安達盛長の邸宅跡地に近く、鎌倉最古とも言われる由緒ある神社である。源氏と縁が深く、『吾妻鏡』には源頼朝が社殿を修理したり、北条政子や源実朝も参拝したと記されている。神社の鳥居の脇には、安達盛長邸跡の石碑がある。

梶原景時

生涯

生年未詳～正治２年(1200)。相模国住人五郎景清（景長とも）の子。鎌倉の梶原を本拠とする。通称平三。源頼朝挙兵の時には、平家方の大庭景親に属していたが、石橋山の合戦で頼朝の危機を救って以来頼朝に信頼され、木曽義仲追討をはじめ、平家追討に功をあげた。文治元年（1185 年）屋島の合戦では、源義経と「逆櫓の策」を争い、義経を頼朝に讒訴し、失脚に追い込んだ。「言語巧みなる士（弁舌巧みな士)」として頼朝に重用され、侍所所司・厩別当などの要職についた。歌道家後徳大寺家左大臣実定に仕えていたこともあり、京都的な教養をもち、歌道にも通じた。鎌倉殿を支える１３人の重臣の１人。

しかし、その要領のよさと、巧みな弁舌によって、人をおとしいれることが多かったとして、後世悪役とされがちである。正治元年（1199）10 月、結城朝光に謀反の疑いありと将軍源頼家に讒言したことから、有力御家人 66 人の弾劾を受けて、鎌倉を追放された。翌年上洛の途中、正月 20 日駿河国清見関の在地武士に討たれた。

文化事績

景時の和歌と連歌を紹介しよう。

建久 6 年 (1195) 4 月 27 日景時が頼朝の使者として住吉神社に馬を献上したときに、釣殿の柱に書いた和歌が次の一首である。

我君の手向の駒を引きつれて行く末遠きしるしあらはせ　（『吾妻鏡』梶原景時）

（我君〈頼朝〉寄進の駒を引きつれて行く、行く末遠く源氏の御栄えがありますように、霊験をあらわしてください）

「行く」に「行く末」を掛け、神祇歌として優れている。

建久元年(1190)10 月、頼朝が上洛するとき、遠江国（静岡県）浜名宿で、頼朝と景時が連歌に興じた。宿場町の遊女たちへの引き手物はすでに山と積まれているのに、頼朝は座興で「さて遊女の君たちには何を贈ろうか」と、「橋」「わたす」の縁語を用いて軽口で詠みかけた。景時も積まれた品物とは似ても似つかない榑（くれ）や杉など、掛詞や縁語を駆使して、こっけいな下句を付けて、座を盛りあげた。

橋本の君には何かわたすべき　（『吾妻鏡』源頼朝）

（橋本宿〈浜名郡〉の遊女に、何を引き出物におくろうか）

ただ杣川のくれてすぎばや　（『吾妻鏡』梶原景時）

（ただの杣(材木の丸太)川をくれて〈皮のついたままの丸太「榑」と「くれる」の掛詞〉過ぎ(「杉」と「過ぎ」の掛詞)よう

史跡

鎌倉市梶原の御霊神社は、梶原の氏神社。本殿に梶原景時の木像があり、社傍のやぐら内には景時の墓と伝える五輪塔がある。

比企能員

生涯

生年未詳～建仁３年（1203 年）。比企藤四郎と呼ばれた。父母は未詳。源頼朝の乳母比企尼の養子。比企尼は、頼朝が伊豆に配流されると武蔵国比企郡（埼玉県比企郡・入間郡）に移り住み、頼朝に物心両面にわたる援助を行った。その縁から、能員も早くから頼朝に仕え、平氏打倒、奥州討伐の際にも活躍した。さらに、頼朝に長男頼家が生まれると、比企尼の次女・三女・能員室が乳母に召された。さらに、能員の娘若狭局が頼家と結婚、一幡を生んだ。能員は幕府草創以来の功臣として、また頼家の側近として、しだいに重きをなしていった。鎌倉殿を支える１３人の重臣の１人となったが、建仁３年（1203）頼家の重病に際し、全国の地頭職の分配を勝手に決めた北条時政と対立し、能員は９月２日時政の名越亭で殺され、続いて一族も滅ぼされた。

文化事績

鎌倉幕府２代将軍頼家の外戚として権勢を強めた比企能員であったが、北条氏と対立し、比企の乱によって一族は滅亡した。その後、比企一族の恨みによる奇怪な事件が起きたことが今に伝えられている。比企の乱で、前将軍頼家の室讃岐局（若狭局と同一人物と考えられている）は池に入水して絶命し、父比企能員も、わが子一幡も殺されてしまった。はるか後の文応元年（1260）、連署北条政村の娘にその霊がとりついたのだという。『吾妻鏡』同年 10 月 15 日条にその騒動が書き残されている。

十五日　己酉。
相州（政村）の息女邪気を煩ひ、今夕殊に悩乱す。比企判官の女（むすめ）讃岐局が霊祟をなすの由、自託（じたく）に及ぶ。件の局は大蛇となりて頂に大きなる角有り。火炎の如く、常に苦を受く。当時比企谷の土中にあるの由、言を発す。これを聞く人、身の毛がよだつと云々。
（相州政村〈北条政村〉の娘が何かに取り憑かれたようになって、この夜は特にもだえ苦しんだ。比企判官〈比企能員〉の讃岐局の霊が（政村の娘に）祟りをなしているということを、〈娘にのり移った讃岐局の霊が〉言った。この局〈讃岐局〉は大蛇となり、頭に大きな角がある。火炎のような苦しみを常に受け、今も比企ヶ谷の土中にあると言う。

北条政村は娘のために１日で法華経を写経するなど、怨霊を鎮めるために手を尽くした。『吾妻鏡』同年 11 月 27 日条によると、

説法の最中、件の姫君悩乱し、舌を出し唇を舐め、身を動かし足を延ばす。ひとえに蛇身の出現せしむるに似たり。
（その姫君は激しく苦しんで身悶えし、舌を出して唇を舐めたり、身じろぎして足を延ばしたりして、まるで蛇が現れたようだった）

鶴岡八幡宮の別当隆弁に説かれて霊は鎮まり、姫君は眠りから覚めたように元に戻ったそうだ。そして、その後も若狭局の霊が安らかであるようにと、蛇苦止明神が建てられたとされている。

史跡

妙本寺の寺域は、比企能員邸宅跡である。比企一族は建仁 3 年（1203 年）北条時政によって比企ヶ谷で滅ぼされた。妙本寺境内の蛇苦止堂は、源頼家の室若狭局（＝讃岐局）の怨霊を鎮めるため、蛇苦止明神として祀ったとされる。蛇苦止堂の手前右側に蛇形の井があり、比企氏一族滅亡の時、若狭局が家宝を抱いて身を投げたと云われ、今も蛇に化身して家宝を守っていると伝えられている。

三浦義澄

生涯

大治 2 年（1127）～正治 2 年（1200）。三浦義明の次男。母は秩父重綱の娘。子に義村がいる。相模国三浦郡矢部郷（横須賀市大矢部）で生まれ育つ。治承 4 年（1180）8 月、源頼朝が石橋山（小田原市）の合戦で敗北した後、畠山重忠・河越重頼・江戸重長から攻撃を受け、本拠地である三浦の衣笠城が落城する。その後、父の命で安房に渡り、避難中の頼朝に加勢した。

同年 10 月富士川の合戦の帰路、頼朝から相模国府で本領安堵を受け、新恩所領を与えられる。元暦元年（1184）には源範頼に従い、平氏を追撃、壇ノ浦の戦いや奥州征伐において活躍した。建久 3 年（1192）頼朝が征夷大将軍に就任したときには、鶴岡八幡宮で頼朝の臣下としてその任命書を受け取る大役を果たす。

正治元年（1199）に頼朝が亡くなった後、鎌倉殿を支える１３人の重臣に選ばれ、頼家を支えた。その後も、幕府政治の重要な職につき、三浦一族繁栄の基盤を作った。

文化事績

『吾妻鏡』によると、建久 2 年（1191）閏 12 月 7 日、源頼朝は三浦義澄の新造の邸に招かれ、相撲の勝負を楽しんでいる。

> 七日、辛亥、幕下（頼朝）三浦介義澄宅に入御す。この間新造せしむるによって案内申すところなり。終日御興遊。平六兵衛尉義村、太郎景連、佐貫四郎、大井兵衛次郎等を召され、相撲の勝負を決すと云々。
>
> （『吾妻鏡』建久 2 年閏 12 月 7 日）
>
> （七日、辛亥。幕下〈源頼朝〉が三浦介義澄の邸宅に入られた。この間、邸宅を新造したので招待されたのである。終日楽しくお遊びになった。平六兵衛尉（三浦）義村・太郎（三浦）景連・佐貫四郎（広綱）・大井兵衛次郎（実春）らが召され、相撲の勝負が行われたという）

相撲は、後鳥羽院も愛好した芸能で、鎌倉武士たちにも人気の遊びであった。頼朝と義村の親しさをよく物語る場面で、子の義村も勝負に参加している。楽しむ頼朝の笑顔や、義村の真剣な表情を想像すると、とても楽しいエピソードである。

史跡

（写真：横須賀市教育委員会提供）

三浦義澄の墓は神奈川県横須賀市大矢部の薬王寺旧跡にある。元々この寺は、鎌倉殿の重臣１３人の一人である和田義盛が義澄と義宗の冥福を祈るために建てたのだが、明治９年（1876）廃された。

和田義盛

生涯

久安 3 年（1147）～建暦 3 年（1213）。三浦義宗の長子で、義明の孫。祖父義明から和田の地（神奈川県三浦市）を与えられ、弟の義茂と暮らしていた。治承 4 年（1180）、頼朝挙兵に際し、叔父の三浦義澄らとともに参加する。同年御家人統制機関として侍所が創設されると、別当（長官）に任じられた。平家追討に出陣、文治 5 年（1189）の奥州藤原氏征討で武功をあげた。頼朝の死後、頼家の代になって、鎌倉殿を支える１３人の重臣の 1 人として参加した。建仁 3 年（1203）比企氏の乱では北条時政に加担して戦い、将軍頼家から時政の追討を命じられたときには、北条氏に通じて頼家を退けた。建保元年（1213）5 月 2 日北条義時の処罰の方法に憤って挙兵した（和田合戦）で敗北、和田氏は滅亡した。

文化事績

鎌倉時代初期、武士は「芸能人」であった。武芸のパフォーマンスが重要な役目とされた時代、義盛は治承 4 年(1180)三浦義澄の新築された屋敷で行われた「弓始め」に参加している。弓始めとは宮中にて行われた儀式で、射場殿にて弓を射始めることをいう。武家では、正月や弓場の新築落成の時に行われていた。この儀式に参列し射手を務めることは武士の大きな名誉でもあったのだ。

治承四年十二月廿日　戊戌。新造の御亭において、三浦介義澄垸飯を献ず。その後御弓始あり。この事、兼ねてその沙汰なしといへども、公長が両息殊に達者たるの由、聞こしめさるるの間、件の芸を試みしめたまふ。酒宴のついでをもって当座において仰せらると云々。

射手

一番　下河邊庄司行平　　愛甲三郎季隆
二番　橘太公忠　　橘次公成
三番　和田太郎義盛　　工藤小二郎行光

（『吾妻鏡』治承 4 年 12 月 20 日）

（治承四年十二月小廿日戊戌。新築のお屋敷で、三浦介義澄がご馳走を振舞う垸飯を献上した。その後で新築亭での弓始めを行った。この事は予め決めてあったわけではないが、橘右馬允公長の二人の息子が特に弓の名人だからとお聞きになられたので、その腕前を試すために、宴会の余興にこの席上で言い出したという。

射手

一番手　下河辺庄司行平　対　愛甲三郎季隆
二番手　橘太公忠　対　橘次公成
三番手　和田太郎義盛　対　工藤小次郎行光）

史跡

鎌倉市由比ガ浜に和田塚と呼ばれる場所がある。明治 25 年（1892）新道を開くためにこの塚を掘ったところ、埴輪や人骨が出土し、その人骨が和田合戦のものと推定されたことから和田塚と呼ばれている。その地には今、「和田一族戦没地」の碑が建てられている。

足立遠元

生涯

生没年未詳。武蔵国足立郡の在地武士。父は藤原遠兼、母は豊島康家の娘（豊島清元の姉妹）。平治の乱では源義朝に味方し、房総に逃れた源頼朝の再起の際には一番に駆け付け、宇治川の戦いなど、源頼朝の平家追討軍に属して、活躍した。その功績が認められ、東国武士として初めて、武蔵国足立郡の本領を安堵される。

その後、娘の１人は京都の院近臣に嫁ぐなどして、京都の朝廷とのパイプを持ち、文書の保管、政務処理を行う公文所（くもんじょ）（後に政所）でも寄人として活躍した。武士としての力量だけでなく、文筆も巧みで、今でいう文武両道の人物であったらしい。鎌倉殿を支える１３人の重臣の１人に選ばれ、源氏４代（義朝・頼朝・頼家・実朝）に仕えた。

文化事績

建久元年（1190）11 月、源頼朝はおびただしい数の随兵を率いて上洛した。京都の人々が見学するほどの華やかな行列であった。遠元は、右近衛大将拝賀の布衣侍に選ばれて、参院の供奉を行っている。朝廷などでの儀式に精通していたようで、文官的な性格を持つ人物だったのだろう。

埼玉県桶川市末広にある屋敷跡に、「足立遠元館」が設置されている。また、桶川市総合福祉センターの建物の南側に「伝足立右馬允遠元館跡」の石碑がある。実際に足立遠元の館があったとされる場所は、さいたま市にもあり、特定できていない。さらに、諏訪雷電神社も足立遠元の館跡の可能性があるともいわれている。遠元の引っ越し、または一族の館が近くにあったことで、情報が混在しているのかもしれない。

鎌倉の史跡

鎌倉幕府の政所跡地は、鶴岡八幡宮から東方に歩いて 200mほどの距離にある。現在は石碑もなく、小さな案内板だけが昔を伝えている。

八田知家

生涯

康治元年（1142）～建保 6 年（1217）。常陸国八田を本拠地とする。下野国国司の名門宇都宮氏の２代目当主八田宗綱の四男。源頼朝の乳母寒河尼は姉妹にあたる。

源義朝から実朝まで 4 代にわたって仕えた。治承 4 年（1180）頼朝が挙兵すると、早くから参戦し、寿永 2 年（1183 年）、野木宮合戦では頼朝の叔父志田義広と戦い、勝利を収める。元暦元年（1184 年）、頼朝は平家討伐のため弟の範頼らを西国に派遣、知家も従った。元暦 2 年（1185 年）1 月に豊後国へ渡り、3 月の壇ノ浦の戦いでは平家を滅亡に追い込んだ。

頼朝の死後、家督を継いだ頼家を支える１３人の重臣その 1 人に加わった。

文化事績

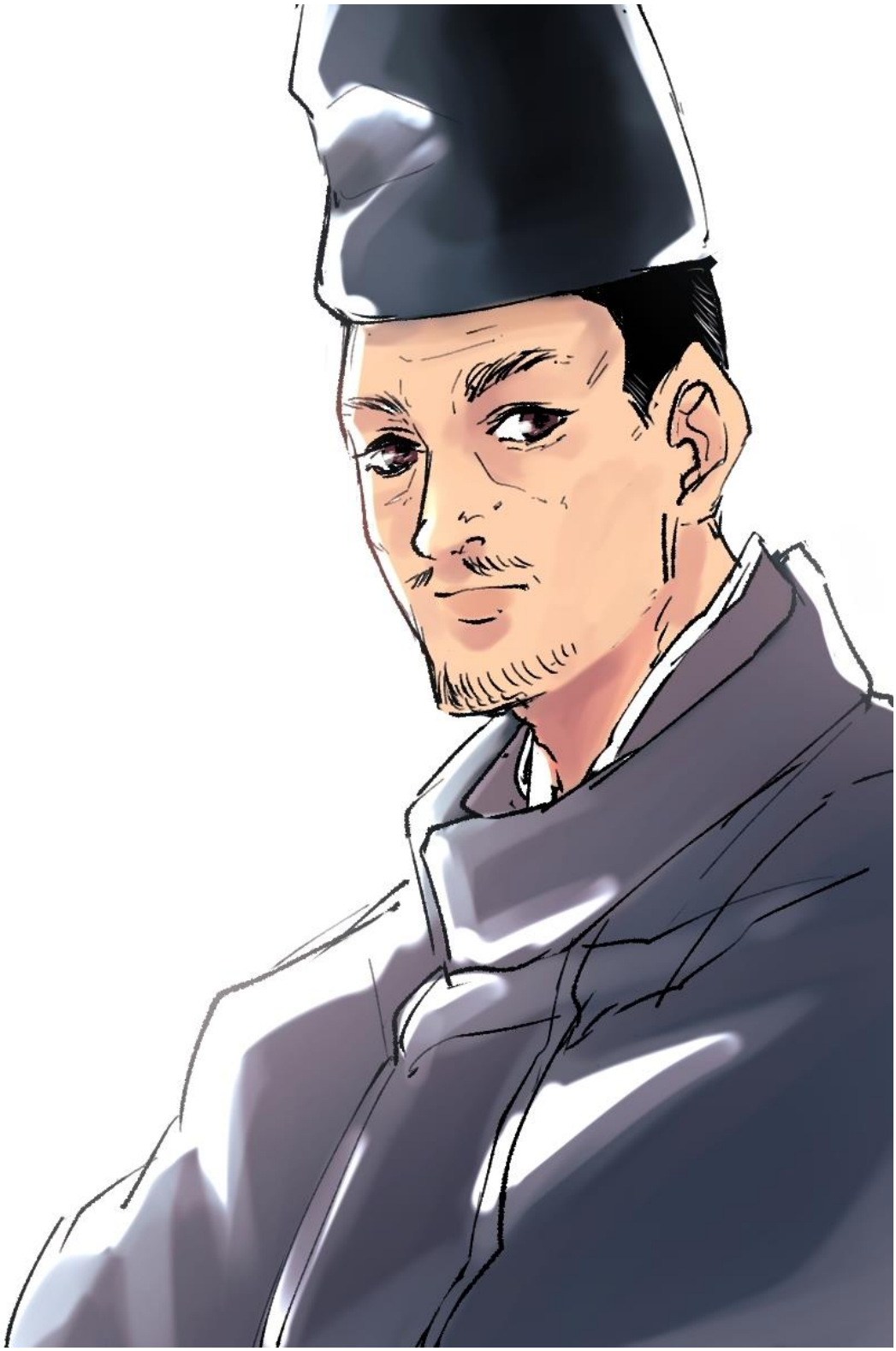
八田知家は文治 3 年（1187 年）8 月 15 日、鶴岡八幡宮（神奈川県鎌倉市雪ノ下）で催された放生会（ほうじょうえ）に、源頼朝、源範頼、大内義信、加々美遠光、安田義定、伏見広綱、小山朝政、千葉常胤、三浦義澄、足立遠元らとともに参加している。これが現在の鶴岡八幡宮例大祭の始まりとされる。

放生会は、仏教の殺生を禁じる思想に基づくもので、魚や鳥などを山野や池に放ち、善根を積むという仏教の儀式である。鶴岡八幡宮の放生会では、源平池に鯉などを放つ。『吾妻鏡』には、8 月 1 日から 15 日までの間、殺生を禁止することを関東の荘園などに命令し、鎌倉の海、浜、川、溝に至るまでこれを守るように命令したことが記されている。この儀式には、戦勝祈願、祝言の意味もあったようで、熱心に開催された。

史跡

『吾妻鏡』の文治 3 年（１１８７年）、頼朝と頼家の御行（おんぎょう）始めのとき、「南御門にある八田知家宅に入り」と記されている。知家の屋敷は、大蔵御所の南、現在の岐（わか）れ道（神奈川県鎌倉市雪ノ下）信号の南側にあったか。海蔵寺近くに、仮粧坂切通手前に「景清窟（かげきよくつ）」という史跡がある。平家方の武将、藤原景清が捕らえられ鎌倉に連れてこられた際、和田義盛から預かったのが八田知家だと、『平家物語』や『源平盛衰記』にその名が記されている。景清は、「悪七兵衛（あくしちびょうえ）」という異名を持ち、勇猛な武将として歌舞伎や能に登場する人物である。

中原親能



生涯

康治 2 年（1143）～承元 2 年（1208）。父は、藤原光能（『大友家文書録』）という説と中原広季（『尊卑分脈』）という説がある。前者の場合、母が前明法博士中原広季の娘だったので、外祖父中原広季の養子となり、中原氏を称することになったという。後者の場合、大江広元の兄となる。

相模国で育ったため、伊豆国の流人時代の源頼朝と知り合ったという説もある。頼朝の使節としてしばしば上洛し、朝幕間の折衝に努めた。源平合戦時には平氏追討軍に加わって鎮西に渡り、文治 5 年（1189）の奥州征討に際しても、現地に赴いて戦後処理にあたり、幕府の鎮西奉行、政所の公事奉行人、京都守護、鎌倉殿を支える 13 人の重臣などを歴任した。

鎌倉亀谷に居を構え、承元 2 年（1029）12 月 18 日 66 歳で没した。

文化事績

『石山寺縁起絵巻』（鎌倉後期から江戸中期にかけて作られた全 7 巻 33 段の絵巻物・重要文化財）によれば、中原親能は頼朝に命じられて、謀反人を追討する際、石山寺に参詣して戦勝を祈願したところ、毘沙門天（びしゃもんてん）が現れ、勝利を収めることができたという。

その報恩として、親能は石山寺に勝南院を建立し、妻の亀谷禅尼（ぜんに）は剃髪（ていはつ）後石山寺に移り住み、法塔院を建立、大日如来の胎内に頼朝の髪を収めたと伝えられている。

史跡

鎌倉の亀ケ谷（かめがやつ）（現在の鎌倉市扇ガ谷）に、中原親能の邸宅があった。『吾妻鏡』によると、源頼朝の娘三幡がそこに葬られているという。親能の妻は、三幡の乳母であった。中原親能の邸宅が亀ケ谷にあったことと、三幡の最期については、『吾妻鏡』に詳しい。現代語訳で引用しよう。

> 正治元年（1199）六月三十日。庚寅。曇り。昼１２時頃に乙姫（三幡）が亡くなった。年は十四才。尼御台所政子様は嘆き、沢山の人々の悲しみ嘆く事は書ききれない。乳母夫の中原親能は出家をするほどの悲しみであり、定豪法橋が戒師となった。今夜午後八時頃、乙姫の亡骸を中原親能の亀谷の屋敷の持仏堂に埋葬した。北條義時、大江広元、小山朝政、三浦義澄、結城朝光、八田知家、畠山重忠、足立遠元、梶原景時、宇都宮頼綱（一番最後尾に白い喪服を着ずに）、佐々木盛季、二階堂行光達がお供をした。各人白い喪服を着ていたとの事だ。

三幡が葬られているとされる岩船地蔵堂には、大姫が供養されているとも言われている。

大江広元

生涯

久安４年（1148）～嘉禄元年（1225）。父は式部少輔大江維光。一説には、藤原光能とも。母は大江維順の娘。明法博士中原広季の養子となったか。大江匡房の曾孫。建保 4 年（1216）、陸奥守に任官した際に本姓大江に変更した。中原親能は義兄。

広元は非常に頭が切れ、持ち前の頭脳で乱世を生き抜いた賢人であった。元暦元年（1184）に鎌倉へ下ると、公文所別当に就任し、『吾妻鏡』によれば元暦 2 年（1185）に設置された守護、地頭は広元の案だったという。

頼朝の死後は、北条政子の信任をうけ、北条氏と協力して政務にあたった。正治元年（1199）4 月鎌倉殿を支える 13 人の重臣の 1 人に選ばれ、その後の比企一族の滅亡、将軍頼家の修禅寺幽閉、畠山重忠追討、北条時政出家、平賀朝政（朝雅）追討事件などにも参画している。承久の乱が起きると、京へ攻め上る策を主張し、幕府側の勝利に大きく貢献した。

三本の矢で有名な戦国大名・毛利元就は広元の子孫であり、同じく頭の切れる武将であった。

文化事績

広元は歌や舞踊などの文化とはあまり縁がなく、「お堅い公務員」と評されがちな人物である。しかし、『吾妻鏡』承元 4 年（1210）５月６日、将軍源実朝が大江広元の邸を訪れ、「和歌以下の御興宴」に及んだことが記されている。このとき、広元は実朝に三代集（『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』）を贈っている。広元も和歌の素養はあったはずだ。

> 将軍家、広元朝臣の家に渡御す。相州・武州等参らる。和歌以下の御興宴に及ぶと云々。亭主、三代集をもって贈物となすと云々。
>
> （『吾妻鏡』承元 4 年 5 月 6 日）

史跡

大江稲荷は、鎌倉十二所の広元を祀った神社である。金沢鎌倉街道の少し奥にあり、街道沿いには案内看板もある。自然や静けさに包まれるような境内の雰囲気は、冷静な人物であった広元を彷彿とさせるだろう。

大江稲荷から徒歩５分程度の、街道から外れた住宅地に大江広元邸址は位置する。広元の屋敷があったとされる場所として、碑文の刻まれた石碑が設置されている。

大江広元墓①は、長州藩主であった広元の子孫毛利氏が建立した五輪供養塔である。三基が並んだ構造になっており、広元のほかには子孫の毛利季光の墓と島津氏の祖である島津忠久の墓がある。頼朝の墓の近くに位置しているが、これは毛利氏の意図的なものだと言われており、武家政権の祖である頼朝の墓の近くに自らの祖の墓をおくことで近代大名としてのプライドを守ったのだろうと推測されている。

大江広元墓②は、瑞泉寺と明王院の間の山道脇に位置する石造の層塔であり、大江広元邸址の伝承の根拠となったと推測される。しかしこちらは、いつだれが作ったか等の伝承がはっきりしていないため「伝」と称されており、先述した「大江広元墓」と区別されている。

三善康信

生涯

保延 6 年（1140）～承久 3 年（1221）。父は不明、母は源頼朝の乳母の妹。明法家三善家に生まれ、京都で有能な役人として活躍、伊豆に配流されていた時期の頼朝に京都の情報を送っていたといわれる。特に、治承 4 年(1180)6 月には、源氏追討の命令が出されたことをいちはやく伝え、頼朝の挙兵の契機をつくった。

元暦元年(1184)、頼朝の招きにより鎌倉に下向し、大江広元らと政務の補佐を行う。同年 10 月、頼朝の御所内に問注所が設置されると、実務は善信に任され、建久 2 年(1191)正月、政所・侍所・問注所の幕府三機関が整備されると、善信は問注所の初代執事（長官）に任じられた。鎌倉殿を支える１３人の重臣のメンバーに加わった。

承久 3 年(1221)の承久の乱では、病気を押して出仕し、京都に進撃することを主張し、勝利に貢献した。同年 8 月、病が重くなり、問注所執事の職を子息康俊に譲り、同年 8 月 9 日に没した。享年 82 歳。

文化事績

源頼政の娘で、二条天皇、後鳥羽院中宮任子に出仕した二条院讃岐（『百人一首』９２番作者）との贈答歌が、『玉葉和歌集』に収められている。詞書によると、二条院讃岐が伊勢国の領地（小幡）に関する裁判沙汰で鎌倉に下向し、解決の後上京する際のやりとりである。幕府の裁判所である問注所の執事であった三善康信の力を借りて、裁判を成功させることができたのであろう。康信の和歌はかなりうまい。

をばた田の板田の橋のとだえしをふみ直してもわたる君かな

（『玉葉和歌集』雑二・善信〈三善康信〉）

（古歌にいう、「をばた田の板田の橋」が朽ちて壊れたように、小幡の領有権が途絶したのを、橋を直して踏んで渡っていくように、見事に証文を改め、自説を通して帰京されたとは、お見事なあなたの行動ですよ）

朽ちぬべき板田の橋のはしづくり思ふままにも渡しつるかな

（同・雑二・二条院讃岐）

（今にも朽ちてしまいそうな板田の橋を再び作って架け直すように、よくもまあ私の思い通りに〈鎌倉殿とあなたは〉領地の所有権を取り戻してくれたものですよ）

史跡

三善康信が執事をつとめた鎌倉幕府問注所は、御成小学校正門（旧御用邸門）から、今小路を由比ヶ浜方面に行ったところにあったらしく、今御成小学校の向かいに問注所跡の石碑が建てられている。当初は源頼朝の御所内（大倉幕府）にあったが、二代頼家のときにこの場所に移転されたという。

二階堂行政

生涯

生没年未詳。父は京の公家藤原南家の乙麻呂流の下級貴族藤原行遠、母は熱田大宮司季範の妹とされる。母方が頼朝の母の家の出であることもあって、主計寮という役所に配属されるなど、早くから活躍を見せていた。後に政庁と呼ばれる公文所の上棟式の奉公を三善康信とともに任され、寺社の修繕のリーダーや、奥州合戦で戦いの記録を作成して、統括責任者を勤めた。頼朝が死去し、鎌倉殿を支える１３人の重臣の１人に選ばれた。１３人の中でも思慮深く、ブレイン的存在であったようだ。

文化事績

行政は、鎌倉幕府の更なる発展と軍事目的のために、規模の大きい岐阜（稲葉山）城を美濃に築城した。行政の死後も娘婿が城主を継ぎ、戦国時代には織田信長がこの岐阜城を攻略し、天下統一を達成した。

『美濃国明細記』や『美濃国諸旧記』によると、建仁年間（1201～1204）二階堂山城守行政が稲葉山に要害を築き、居住したと記している。その後は行政の女婿佐藤伊賀前司朝光、その子次郎左衛門尉光宗、その弟三郎左衛門尉光資と続き、さらに行政の子孫である出羽守行藤が在城したという。確実な裏付けとなる史料はないが、二階堂氏が美濃に所領を所有していたことは確かである。その後応永年間（1394～1428）に美濃の守護土岐氏の守護代斎藤利永が城を修復し、以後は守護代斎藤家が代々居城とした。

史跡

源頼朝は、奥州合戦で命を落とした人々の慰霊のために、平泉にあった中尊寺の二階大堂大長寿院を模した永福寺を鎌倉に建立することを計画、その造営奉行に二階堂行政（三善善信・藤原俊兼も）を任命した。行政の邸が永福寺の近くにあったため、一族は二階堂という姓を名乗ったらしい。『吾妻鏡』には、完成間近の永福寺を訪れた源頼朝が近くの行政の邸を訪れ、源義澄らが酒肴を持ち込み、酒宴になったことが記されている。

> 二階堂の地に始めて池を掘らる。地形本より水木相応の所なり。近国の御家人に仰せて各々三人の疋夫を召すと云々。将軍家監臨し給ふ。御帰りの時に及び行政が家に入御す。義澄已下宿老の類一種一瓶を持参すと云々。
>
> （『吾妻鏡』建久 3 年 8 月 24 日）

残念ながらこの永福寺の伽藍は火事によって消失したが、跡地が JR 鎌倉駅から 1.8 キロほど先の地に残っている。発掘調査も行われており、寺の敷地内で銅製の経筒や遣水が発見されている。

源頼朝

生涯

久安 3 年（1147）～建久 10 年（1199）。源義朝の三男、母は母は熱田大宮司藤原季範の娘。異母弟に義経。妻北条政子との間にできた頼家、実朝が、鎌倉幕府将軍職に就いた。

１３歳の時に起きた平治の乱に父義朝が敗れ、斬殺されるところを、平清盛の義母池禅尼に命を救われ、伊豆国に配流された。伊豆では北条時政らの監視下に置かれ、約２０年を過ごし、その間時政の娘政子と結婚した。伊豆にあっても、相模国の武士たちと連絡をとり、政治状況の変化を把握していたという。頼朝が挙兵した時には多くの豪族的武士たちが従い、平氏を滅亡させる。

さらに奥州を制圧した後、文治元年（1185）全国に守護・地頭を設置し、建久 3 年（1192）征夷大将軍に任命された。しかし、建久 10 年（1199）正月 13 日 53 歳で死去。『吾妻鏡』によれば、相模川にかける橋の落成供養に出席した帰り路、落馬したことが死因という。その遺骸は、鎌倉幕府後方の持仏堂（神奈川県鎌倉市西御門）に納められた。

文化事績

陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ書き尽くしてよ壷の石文（いしぶみ）　　源頼朝

（陸奥の岩手・信夫ではないが、言わないでがまんしているというのは、理解できません。書き尽くしてください、壷の碑（いしぶみ）ならぬ、文に）

（『新古今集』雑下）

建久 6 年（1195）3 月、東大寺供養に参列するために上京した源頼朝は、摂関家の出で高僧の慈円（じえん）と 77 首もの歌を詠み交わした。この歌はその中の一首で、慈円（じえん）が「思うことをあなたに言い伝えることができない。私の気持ちを手紙に書き尽くすことなどできないから」と詠んだ歌に対する返歌。

頼朝は和歌を詠むことに熱心で、『新古今和歌集』以下の勅撰和歌集に 10 首も入集している。頼朝は、鎌倉・京都間を何度も往復し、東海道の歌枕（和歌に詠まれる地名）を詠んでいる。富士山の歌を紹介しておこう。

道すがら富士の煙も分かざりき晴るるまもなき空のけしきに

（『新古今集』羇旅）

雲がかかって富士山の煙がはっきり見分けられなかった、残念！という歌で、有名な富士山の煙（この当時、噴煙が出る時期もあった）をどうしても頼朝は見たかった、富士山の煙を詠んでみたかったのだ。目をこらして山頂を見つめる頼朝の姿を想像すると、微笑ましく、強い将軍像とは違う姿が浮かび上がってくる。頼朝は、和歌を代表とする京都、王朝文化に強い敬意を持っていたのだ。

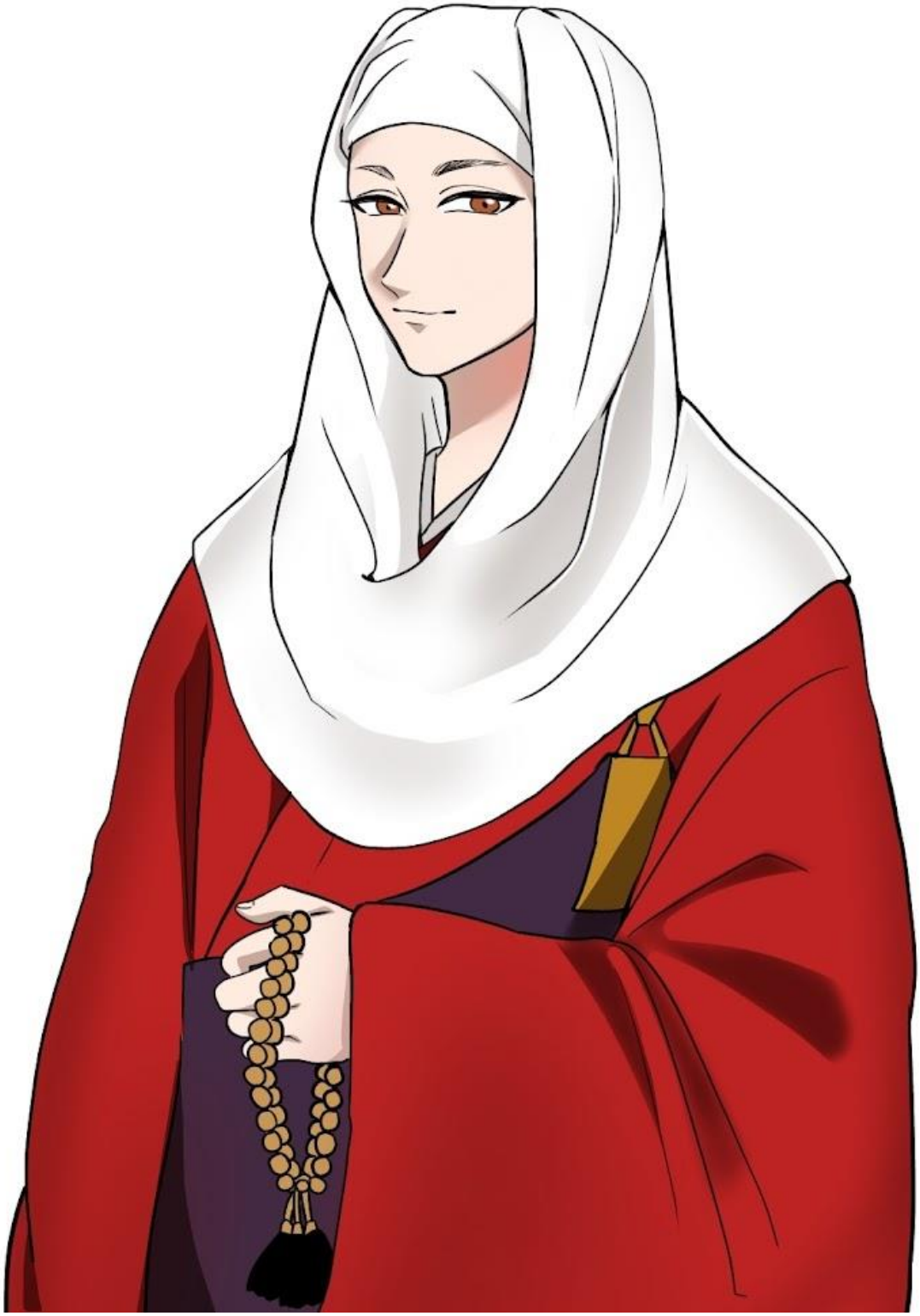
史跡

鎌倉観光に外せないスポットが、鶴岡八幡宮である。頼朝の先祖が、源氏の氏神である京都の石清水八幡宮を鎌倉に迎えたのが始まりである。元々は、由比ヶ浜にあったものを今の位置に勧請した。

佐助稲荷も、頼朝ゆかりの神社として有名。伊豆の流人時代の頼朝が寝ていると、「かくれ里の稲荷」と名乗る翁が夢枕に立ち、平氏挙兵を促したという。平家追討の後、頼朝は畠山重忠に命じて「かくれ里の祠」を探し当てさせ、稲荷神社を再建させたと伝えられている。頼朝は昔兵衛佐であったので佐殿（すけどの）と呼ばれていて、その佐殿を助けた神ということで佐助稲荷と称された。

頼朝を将軍に導いたのは、八幡神のお使いの鳩と、稲荷神のお使いの狐ということになろうか。

北条政子



生涯

保元 2 年（1157）～嘉禄元年（1225）。父は、北条時政。北条義時は弟。源頼朝の妻。2 代将軍頼家、3 代将軍実朝の母。伊豆配流中の頼朝と結婚、石橋山の戦いのときは伊豆に隠れていたが、まもなく鎌倉に迎えられた。寿永元年（1182 年）には頼家を、建久 3 年（1192）には実朝を生んだ。3 年後頼朝に従って上京し、長女の大姫入内を意図して、朝廷の実力者丹後局と面談。しかしこれは大姫の死によって実現しなかった。

正治元年（1199）に頼朝が亡くなった後、出家して尼となり、鎌倉殿の 13 人と呼ばれる重臣による合議制政治を成立させ、頼家の独裁を抑えた。頼家重病に際し、父と謀って頼家を廃して実朝を将軍とした。元久 2 年（1205）時政が後妻牧方とともに実朝将軍廃立を謀ったため、弟義時とともに、父を伊豆へと送った。

義時執権時代も常に政務の中心にあった。承久の乱（1221）に際して、御家人を集めて演説を行い、心を一つにして京に攻め上らせた逸話は有名である。義時急死後は、甥の泰時（義時の子）を執権とし、自らは「尼将軍」として存在感を持ち続けた。嘉禄元年（1225）7 月 11 日病により他界。享年 69 歳。

文化事績

本来なら源頼朝は父義朝が平治の乱に敗れたときに、死刑に処されるはずだったが、平清盛の義母「池禅尼」によって助命され、伊豆国に流刑となった。こうした経歴がある頼朝との縁談は、北条氏にとって命取りになると考え、政子の父時政は 2 人の交際に反対した。それでも頼朝を諦められない政子は雨の中伊豆山権現で待つ頼朝のもとに駆けつけ、愛を貫く（『源平盛衰記』）。後に、時政も 2 人の結婚を認め、頼朝を支援するようになる。ちなみに、石川さゆりの『天城越え』は、頼朝・政子の駆け落ちをモデルにしているという。

愛し合って夫婦となった二人であるが、『吾妻鏡』には夫頼朝の不実を許さない政子の姿が記されている。頼朝が亀の前という「柔和な」（『吾妻鏡』）女性を鎌倉に呼び寄せたことを知った政子は、牧一族の牧宗親に命じて、彼女をかくまっていた伏見広綱の邸を破壊させた。広綱は亀の前を連れ出し、避難したという。また、大進局（だいしんのつぼね）が頼朝の子を出産したときには、母子ともども鎌倉から追放している。後に尼将軍として君臨する強い女性にふさわしいエピソードかもしれない。

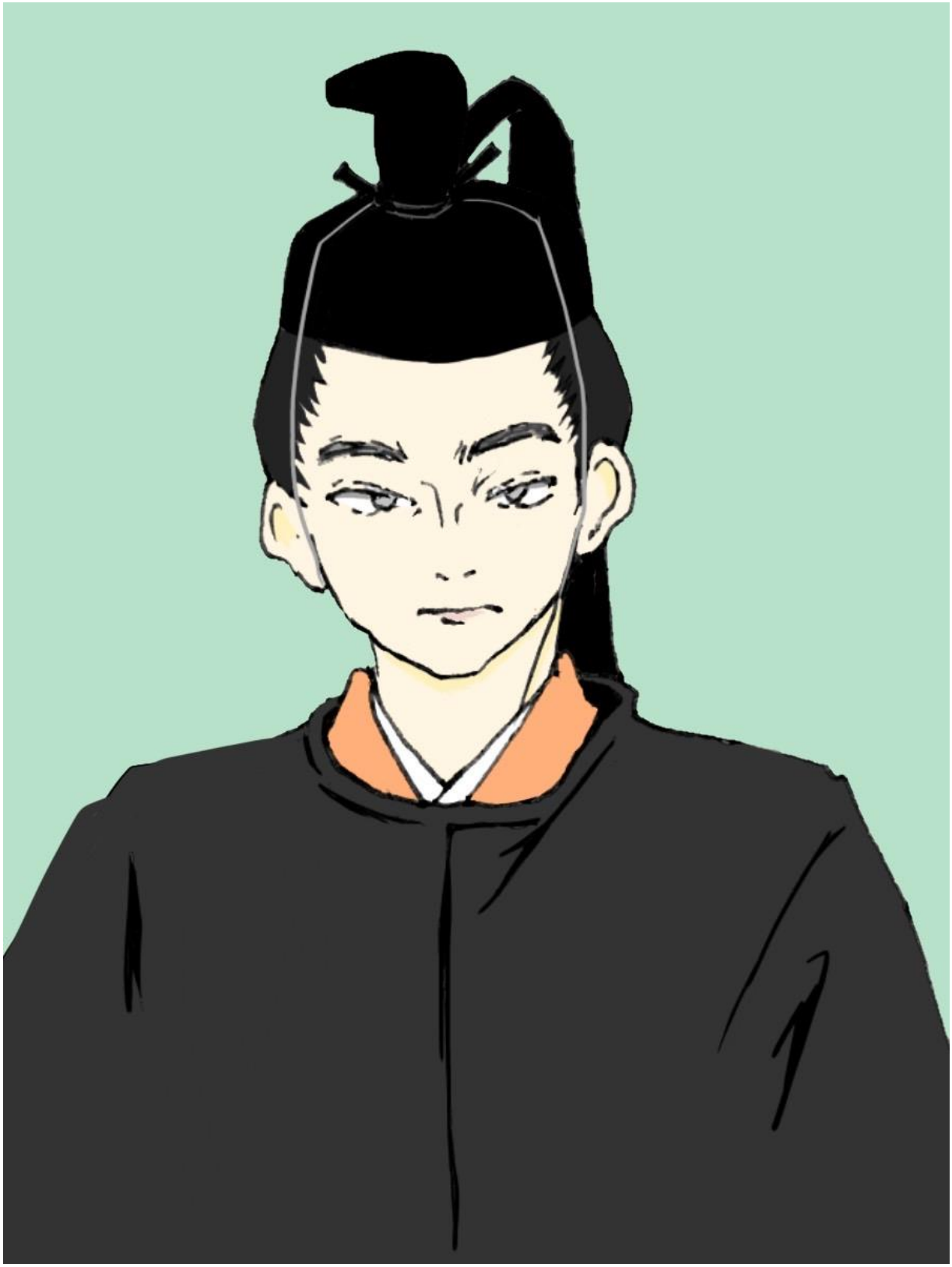
史跡

寿福寺は、正治 2 年（1200）年、北条政子が夫頼朝の死後、頼朝の父義朝の旧邸跡に明庵栄西を招いて創建した寺で、13 世紀後半になって禅宗の寺院となった。本尊は釈

迦如来坐像。その脇には大きな仁王の像がある。鎌倉五山の第三位。三代将軍実朝もしばしば訪れ、最盛期には十数か所の塔頭を擁する大寺であったという。

寿福寺の裏手の墓地の奥に、源氏山をくり抜くようにしてやぐらがある。その中のひとつに、北条政子と源実朝のものと言われる五輪塔が安置されている。実朝の塔があるやぐらは「唐草やぐら」と呼ばれ、唐草模様の彩色がかすかに残った珍しいものである。

源頼家



生涯

寿永元年（1182）～元久元年（1204）。鎌倉幕府第二代将軍。源頼朝と北条政子の長男として、鎌倉の比企能員邸に生まれる。頼朝は安産祈願のために、諸将に若宮大路の段葛の築造を命じたという。父頼朝が急死した後すぐに、北条時政・大江広元・梶原景時・和田義盛ら１３人の重臣による合議制が打ち出され、家督を継いだ頼家の権限は制限された。建仁２年（1202 年）征夷大将軍に任命されるが、１３人の宿老に包囲され、孤立を深めていく。頼家は妻の父である比企能員を登用し、権力の回復を目指したが、逆に有力御家人たちの離反を招く結果になってしまった。その後頼家は政争に敗北し、伊豆国修善寺に流され、元久元年（1204 年）に入浴中に暗殺され、生涯を終えた。その背景には、祖父北条時政の指示があったらしい。享年２３歳であった。

文化事績

『吾妻鏡』は、蹴鞠、狩猟に熱中する頼家の姿を書き留めている。建久４年（１１９３）５月の富士野の狩では、１３歳の頼家が、鹿を射て、周囲を驚かせたという（『吾妻鏡』）。反面、和歌の記事はほとんどない。弟実朝と対照的である。

ただ、江戸時代初期に制作された『武家百人一首』（姫路城主榊原忠次編）には、頼家の伝承歌が収められている。

夜もすがらたたく水鶏（くひな）の天の戸を開けて後こそ音せざりけれ

（一晩中戸をたたくように鳴いている水鶏も、夜が明けた後は音をたてないことだなあ）

史跡

伊豆の修善寺には、源頼家供養の碑が建てられている。元禄 16 年（1704 年）頼家の没後 500 回忌の際に、当時修善寺住職であった筏山智船（ばっさんちせん）和尚が供養のために建てたものである。

また、同じく修善寺には、頼家の冥福を祈り、母で北条政子が建立した指月殿がある。本尊の釈迦像は寄木造りで作られており、本来持ち物の無い釈迦像が蓮の花を持っているのが特徴的である。

源実朝

生涯

建久 3 年（1192）～建保 7 年（1219）。鎌倉幕府第 3 代将軍。父は源頼朝。母は北条政子。兄姉に頼家や大姫などがいる。幼名は千幡（せんまん）。乳母には政子の妹・阿波局が選ばれている。頼朝の次男として誕生した実朝は、父の寵愛を受け、不自由なく成長した。

比企能員の乱により兄の頼家が、伊豆国修善寺に幽閉、殺害されると、建仁 3 年（1203）征夷大将軍の地位につく。後鳥羽院の側近坊門信清の娘を京都から正室に迎え、都の公家文化に親しみ、和歌に熱中する。政治にも意欲的に取り組み、将軍の権力を強化しようとしたが、その姿勢を恐れる北条義時、大江広元らと対立し、実朝は次第に孤立してゆく。

京都の後鳥羽院は、建保 7 年（１２１９）実朝に右大臣の官を授けた。武士として初めて右大臣となったことを祝して、鎌倉鶴岡八幡宮に拝賀した帰途、兄頼家の息子公暁に殺された。享年 28 歳であった。父は実朝の陰謀によって殺されたのだと吹き込まれたため、復讐したとも言われている。実朝暗殺直後、公暁も殺されたため、源氏の正統は絶え、源氏将軍も 3 代で断絶した。

文化事績

実朝は若い頃から和歌に親しみ、藤原定家の指導を受けて、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』に学んだ。家集『金槐和歌集』（定家所伝本）には、663 首の和歌が収められている。その中から、鎌倉の海を詠んだ和歌 2 首を紹介しよう。

世の中は常にもがもな渚漕ぐ海人の小舟の綱手かなしも　　（『金槐和歌集』）

（世の中は、永遠に変わらないでほしいなあ。海岸沿いを行く漁師の小舟の、引き綱を引いている姿の、なんといとおしいことか）

舞台は鎌倉の由比ガ浜か。「みちのくはいづくはあれど塩釜の浦こぐ舟の綱手かなしも」（『古今和歌集』陸奥歌・読み人知らず）を本歌取りし、鎌倉の海の漁師の営みを眺望し、永遠を願う姿は、帝王らしい風格である。

大海の磯もとどろに寄する波われてくだけてさけて散るかも　　（『金槐和歌集』）

（大海の磯も轟き響けとばかり激しく打ち寄せる波は、割れて、砕けて、裂けて、しぶきをあげて飛び散っていることよ）

この和歌も、おそらくは鎌倉の海を読んだものだろう。力強い東国武士らしい歌である。

史跡

鶴岡八幡宮の境内にある白旗神社には源実朝と父頼朝がともに祀られている。

由比ガ浜の鎌倉海浜公園（坂ノ下）には実朝の歌碑が建てられており、『小倉百人一首』に選ばれた「世の中は」の一首が刻まれている。

源義経

生涯

平治元年（1159）～文治 5 年（1189）。源義朝の九男、頼朝の異母弟。母は常盤御前。幼名は牛若丸、遮那王丸、九郎。検非違使に任ぜられて九郎判官と号した。

平治の乱後、鞍馬寺に預けられ、のちに奥州の藤原秀衡のもとに身を寄せた。治承 4 年（1180）兄頼朝と黄瀬川の陣で再会、源氏軍の一員となった義経は「九郎主」とよばれ、源家一門の御曹子扱いとなる。「鎌倉殿の代官」として兄範頼とともに平家追討の代将軍となり、義仲を討ち、次いで平氏を一谷・屋島・壇ノ浦に破って、滅亡に追いこんだ。

これほど大きな勲功をあげながらも、後に頼朝と対立、鎌倉入りを許されず、有名な「腰越状」を送るが、拒否。後白河院を頼んで反逆を企てたが、失敗、奥州に逃れる。秀衡の死後、その子泰衡の裏切りに遭い、衣川館で自害した。31 歳であった。義経が頼朝と対立するに至ったのには、様々な理由があるが、やはり義経は郎党組織を持たず、一匹狼的な存在であったことが大きい。本来御家人が組織全体の集団行動として戦うべき合戦が、義経のヒーロー型の戦い方となり、頼朝の御家人たちと対立し、頼朝にも疎まれる結果となった。

義経の生涯については不明な点が多く、後に義経伝説が生まれ、『義経記』が作られ、歌舞伎など多くの芸能の題材ともなった。

文化事績

義経が詠んだことが確実な和歌は残っていないが、伝承歌がいくつかある。

この歌は、逃避行中の吉野山（奈良県）で愛する静との別れを決心した義経が詠んだものとされている。静への未練がにじむ、悲しい歌である。

急げどもゆきもやられず草枕静になれし心ならひに　（『義経記』）

（急いで行こうと思っても行くことができない。静かに旅寝すること、静と一緒にいることが習慣となってしまっているから）

次の歌は、義経が最後まで付き従った武蔵坊弁慶におくった、いわゆる辞世歌である。

後の世もまた後の世も廻りあへ染む紫の雲の上まで　（『義経記』）

（後世も、またその後世もめぐり逢おう、あの紫に染まった雲の上の浄土まで）

義経は、判官びいきということばが生まれるほど、後世愛されるヒーローとなった。この辞世歌も、逃亡する義経を悼み、極楽（紫雲）に往生してほしいと願う民衆の願いが生んだものと言われている。

岩手県一関市では、毎年 5 月 1 日～5 日に「春の藤原まつり」が開催される。藤原氏三代の栄華を今に再現した祭りで、3 日に開催される「源義経公東下り行列」は、義経が兄頼朝より逃れて平泉に着いた時、藤原秀衡公が喜んで出迎え、民衆も喚起したとい

う情景を再現している。義経公役には毎年人気の芸能人が扮している。そのほかにも稚児行列、郷土芸能、弁慶力餅競技大会など、さまざまな催しが行われている。

史跡

義経の史跡は京都と平泉に多く残されている。

京都では、「牛若丸誕生井」（源義朝の屋敷があったとされ、かつては「洛北の名所」だったという）、「五条大橋」（牛若丸時代の義経と弁慶が出会ったという伝説で知られる橋）、「神泉苑」（延暦 13 年〈794 年〉に桓武天皇によって造営された。雨乞いの霊場だったといわれ、静御前が舞ったと伝えられている。義経と静御前が出会った場所とも言われている）が有名。

平泉では、「高館義経堂」が義経最期の地と言われており、その跡地に義経堂が建立、内部には義経像が祀られている。しかし、実際に亡くなったのは、衣川の北側にあった館と推測されている。

静御前

生涯

生没年未詳。源義経の愛妾。平安時代末期から鎌倉時代初期を生きた白拍子。母は同じく白拍子の磯禅師。白拍子とは、平安時代末期から登場した歌舞を演じた芸能者のことである。

静御前の生涯は、『吾妻鏡』『義経記』に詳しい。源平合戦後、兄の源頼朝と対立した義経が京を落のびる際に同行するが、吉野で義経と別れ、京へ戻る。しかし、途中で従者に持ち物を奪われ、山中をさまよっているところを、山僧に捕らえられ、京の北条時政に引き渡され、文治2年（1186年）3月母の磯禅師とともに鎌倉に送られる。鎌倉では、義経に所在に関して厳しい尋問を受けたが、固く沈黙を守った。同年4月8日、静は頼朝に鶴岡八幡宮社前で白拍子の舞を命じられた。その時、静は義経を慕う歌を歌い、頼朝を激怒させるが、妻の北条政子が取りなして命を助けた。やがて静は一児を生んだが、頼朝はこれを鎌倉由比ヶ浜に捨てさせたという。

後世、能『吉野静』『二人静』、浄瑠璃『義経千本桜』などによって、広く知られ、親しまれた。

文化事績

静御前が詠んだ和歌で最も有名なのは、鎌倉で頼朝の目の前で詠んだ義経を慕う二首だろう。

しづやしづしづの苧環繰り返し昔を今になすよしもがな　（『義経記』）

（静よ静よと繰り返し私の名を呼んでくださったあの昔のように、懐かしい義経様の時めく世にもう一度したいものよ）

「苧環（をだまき）」とは、麻糸を球状に巻いたもののことである。「しずやしずしずの苧環」は「繰る」の序詞で「繰る」を飾る役目を持つ。

吉野山峰の白雪ふみ分けて入りにし人のあとぞ恋しき　（『義経記』）

（吉野山の嶺の白雪を踏み分けて東国に行った義経様のあとが恋しい）

義経と最後に別れた吉野山の雪の情景が、彼女の中で消えることのない思い出となっているのだろう。自分を苦しい状況に突き落とした張本人の前で、敵対する人物のことを思わせる和歌を詠むとは、静御前の度胸の表れか、義経を想う優しさゆえの嘆きか、頼朝への憎しみか。

史跡

鶴岡八幡宮は、源頼朝の祖先源頼義が、京都の石清水八幡宮を勧請（神様の分霊を他の地に祀ること）したことに始まる。頼義は石清水八幡宮を篤く信仰しており、源氏の氏神として八幡神を鎌倉の由比ヶ浜辺に祀った。その後、源頼朝が現在の地に遷した。幕府の重要祭事として、放生会や流鏑馬、相撲、舞楽など今日に継承される祭事を境内

でとり行い、鶴岡八幡宮は東国社会の精神的支柱となった。鶴岡八幡宮の「舞殿」こと、若宮回廊が、静御前が義経を恋慕する和歌を披露した舞台と伝えられている。

畠山重忠

生涯

長寛 2 年（1164）～元久 2 年（1205）。父は、桓武平氏の家系である畠山重能。母は、三浦義明の娘。武蔵国（埼玉県深谷市）に生まれ、幼名は氏王丸、庄司次郎と称された。畠山の氏は、武蔵国出身の武士で、畠山（埼玉県大里郡川本町）の在地領主である父重能の代から名乗るようになった。

源頼朝が平氏討伐に挙兵した治承 4 年（1180）、重忠は父重能に代わり、17 歳の若さで出陣した。木曽義仲追討、源平の合戦、奥州合戦と多くの戦功を挙げ、鎌倉幕府草創にあたって大きく貢献し、頼朝から厚い信頼を得ることとなった。

剛勇、廉直の鎌倉武士の典型としての美談が、『吾妻鏡』などに数多く伝えられている。重忠が地頭を務めていた伊勢の代官が地頭代を押妨するという事件が起きたとき、重忠は捕らえられ、梶原景時によって逆心を疑われた。重忠は、頼朝に逆心など抱いていないことを強く主張し、頼朝に信用された話は有名である。頼朝の二度にわたる上洛の際には、先陣を勤めるなど、側近として活躍した。

しかし、頼朝の死後、北条氏によって、有力な臣下が次々と討たれた。重忠もその一人である。元久 2 年（1205）6 月 22 日鎌倉で騒動が起きたと聞いて駆けつけたところ、武蔵国二俣川（横浜市旭区）で北条義時軍に遭遇、討ち死にした。享年 42 歳であった。

文化事績

文治 2 年（1186）4 月 8 日、静御前が鶴岡八幡宮で舞った際、銅拍子を打ったと『吾妻鏡』に記されているように、歌舞音曲の才に恵まれていたらしい。静御前は京で一流の白拍子であり、舞の伴奏で鼓を担当した工藤祐経も京に長く身を置いた歌曲に優れた人物であった。この二人と共に銅拍子を披露できるほど、重忠は音楽の才能を高く評価されていたのだった。『源平盛衰記』には、重忠が遠方でいななく馬の声を聞き分けるといった逸話も残されており、非常に音感が鋭い人物であったらしい。

また、公正で誠実な思いやりの持った重忠の人柄は、源頼朝をはじめ、当時の御家人達から高く評価されていた。鎌倉武士の鑑として長く顕彰され、小学校の校歌の歌詞、「重忠節」と呼ばれる畠山重忠の一生を歌にした曲もあり、後世に語り継がれている。

史跡

鎌倉における重忠の屋敷は幕府の南門の前辺にあったとされる（『吾妻鏡』）。現在、鎌倉市雪ノ下に「畠山重忠跡」の石碑が建っている。

木曾義高（源義高）

生涯

承安 3 年（1173）～寿永３年（1184）。源義高、清水冠者義高（志水冠者）とも。父は木曽義仲（源義仲）。父義仲は、源頼朝と同じく、以仁王の平氏討伐の令旨を受けて挙兵し、倶利伽羅峠の戦いで平氏の大軍を破り、入京を果たした勇猛果敢な武将。

承安 2 年（1183）木曾義仲と源頼朝が武力衝突寸前となった際、和睦を目的として、当時 11 歳だった木曽義高が人質として鎌倉へ差し出された。表向きは、源頼朝と北条政子の娘大姫（当時 6 歳）の婚約者という形であった。

翌年、父木曾義仲が後白河院と対立し、範頼・義経の追討を受けて、近江国（滋賀県）粟津の戦いで討ち死にする。人質だった義高の立場も危うくなり、源頼朝により命を狙われることとなった。義高の危機を知った大姫や、その母北条政子、いつも双六の相手をしていた側近の海野幸氏などに助けられ、鎌倉を脱出した。『吾妻鏡』によると、大姫の作戦で、女装してあざむいたという。成功したかと思われたが、武蔵国の入間河原八丁の渡で追手に捕まり、堀親家の郎党藤内光澄に殺された。享年 12 歳であった。

文化事績

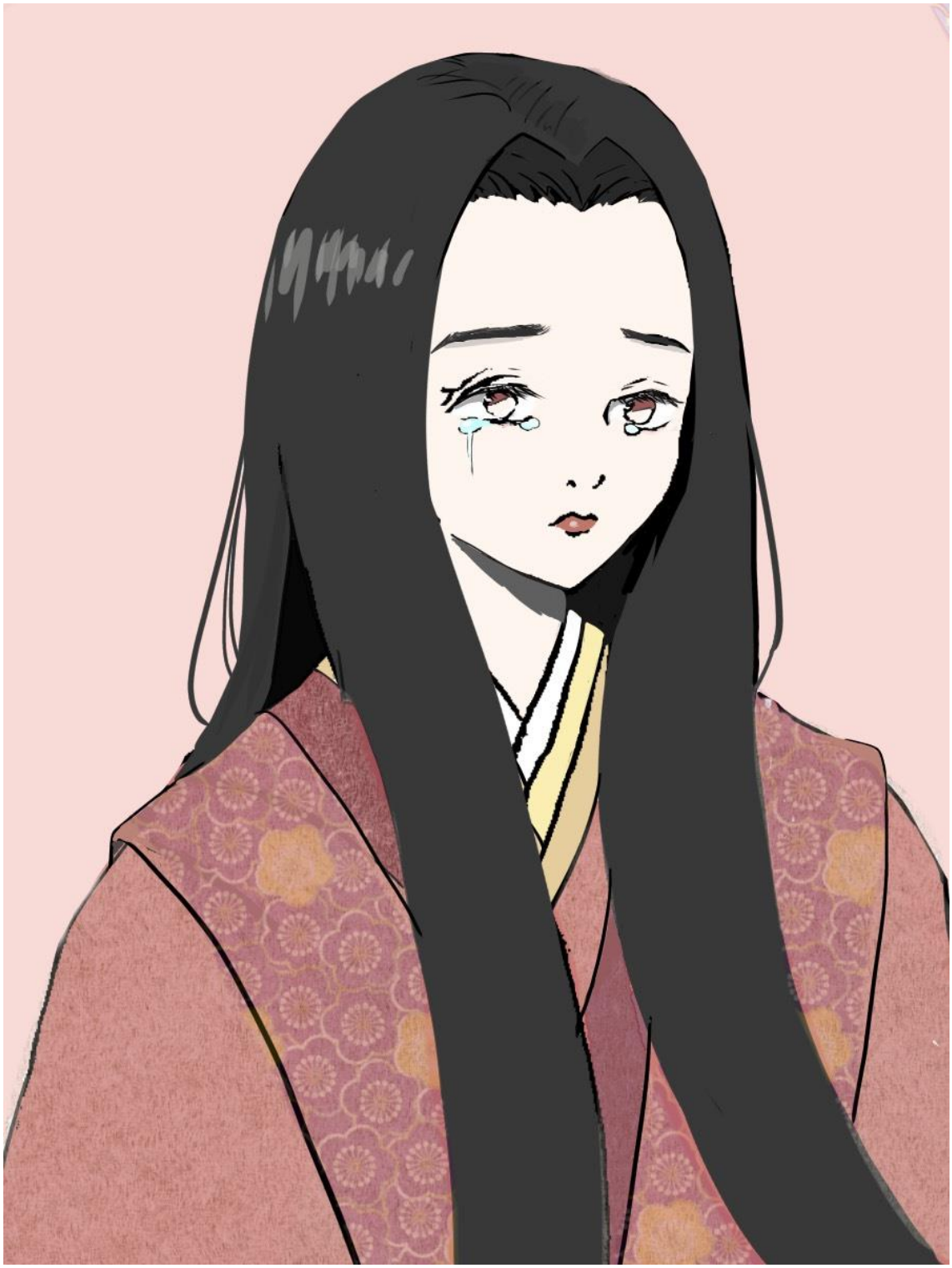
義高の最期の地は、入間川八丁の渡し近辺。義高の供養として、狭山市は町おこしイベントも兼ねて、端午の節句の頃入間川に鯉のぼりを掲げている。眠っている「鯉のぼり」を入間川に放ち、源義高の御霊を供養するというもので、年々「鯉のぼり」の数も増え、記念講演も行われている。

鯉のぼりをシンボルとした理由は、義高の没日とされる 4 月 26 日（陰暦）と６月６日（陽暦）の中間に端午の節句があり、端午の節句に飾られる五月人形や兜には、義高の叔父・義経弁慶など源氏に縁のものが多い、ということらしい。また、義高の御霊が祀られている「清水八幡宮」の社紋は矢車（鯉のぼりの柱の先端につけているもの）であることも一因である。

史跡

大船・常楽寺の裏山には「木曽義高の墓」と伝えられる塚があり、現在、石碑が立っている。塚はこの地の西南約２００メートルほどのところに「木曽免」という田の間にあったのを延宝年中（１６７３～８１）にこの地に移したという。「朝日将軍（木曾義仲）が痛烈で豪快な短い生涯の余韻を伝え、数奇の運命に弄ばれた彼の薄明の子の首級はこの地において永遠の眠りについている」と刻まれている。

大姫



生涯

治承 2 年（1178）か～建久 8 年（1197）。源頼朝の長女、母は北条政子。

大姫は頼朝が伊豆の流人だった頃の子であり、政子は父である時政に結婚を反対されていた。しかし、政子はその反対を押し切り、大雨の中頼朝の元に駆けつけたという。その政子の強い意志に父は折れ、2 人の結婚を認めたのであった。

寿永 2 年（1183）年、木曽義仲の長男・義高（当時 11 歳）が許嫁として、大姫のもとに送られる。しかし、わずか 1 年で頼朝と義仲の関係は破綻してしまい、義仲は頼朝の送った軍によって滅ぼされてしまった。その後頼朝は「敵討ちをされては困る」と考え、義高も斬殺することを命じた。大姫は夜義高を女装させ、屋敷から出した。しかし、翌朝露見して、頼朝は激怒、義高を討ち取る。

大姫は悲しみにうちしおれ、一生をほぼ病床で過ごした。両親の望む一条高能との縁組も拒絶し、後鳥羽天皇の後宮に入れる話があったが成立せず、建久 8 年（1197）7 月 14 日他界した。享年 20 歳であった。

文化事績

大姫と義高の悲恋は、後世の人たちの涙を誘った。小説やドラマの題材にされることも多く、例えば倉本由布は、この悲劇を題材に小説化している。『夢鏡（ゆめのすがたみ）』『鎌倉盛衰記 1　海に眠る　義高と大姫』『約束　大姫・夢がたり』（集英社　1991、1992、1996 年）などである。

史跡

大船駅から歩いて約 15 分ほどのところに位置する常楽寺の裏手の丘に、大姫の墓と言われる祠があり、さらに上に登ってゆくと、義高の墓がある。ここには、義高の首が埋葬されていると伝えられている。また、大姫の守り本尊地蔵菩薩を祀った地蔵堂が、鎌倉市扇ヶ谷に今に残されている。

フェリス女学院大学文学部

日本語日本文学科中世文学(谷 知子)ゼミナール制作